

Contents

特集：オバマ大統領就任演説を読む	1p
＜今週の”The Economist”誌から＞	
”Renewing America” 「アメリカ再生」	7p
＜From the Editor＞ 身内による 3 冊の本	8p

特集：オバマ大統領就任演説を読む

今週、1月20日正午に行なわれた米大統領就任式は、日本時間では21日午前2時に同時中継されましたが、NHK総合の視聴率は実に5.8%だったそうです。同時刻に特番を組んだフジテレビが2.5%、TBSが1.8%、全部あわせると10%を超えて、日本人の10人に1人が「オバマの就任演説」を見た（聞いた）こととなります¹。

最近はおバマ演説が、英語の教材としても人気を呼んでいるとのことで、それだけ日本国内の注目度が上がっている様子。となれば、「米大統領選オタク」の本誌としても放っておけません。第44代大統領バラク・オバマの就任演説についてまとめてみました。

もはや選挙に勝つためではなく

「オバマの就任演説は今ひとつだったね」と言うのは、三ツ星レストランに入って「評判ほど美味くはなかったね」と言うのと同じくらい勇気がいる、もしくは周囲をはばかりの発言であろう。なにしろ、絶賛している人があまりにも多いので。

しかしながら筆者の場合、1月20日の演説にはそれほど感動しなかった。正確に言うと「いつもと違う」という印象があったし、少なくともアイオワ州党員集会での勝利演説（08/1/3）とか、シカゴでの勝利演説（08/11/4）といった成功例には及ばなかったと思う。

パンチラインや歴史に残るフレーズも見当たらなかったし、何よりオバマ本人がめずらしく緊張していて、普段のような闊達さを欠いていた。ひとつには直前の宣誓式で、ロバーツ連邦最高裁長官が規定の言葉を間違えるというハプニングの余波かもしれない。

¹ 月末金曜夜の「朝まで生テレビ」（TV朝日）が平均2~3%だから、平日の夜としては画期的な数字である。

聴衆も、いつもと勝手が違って困っていたのではないかと思う。ワシントンに集まった人たちの中には、"Yes, we can."コールをしたくてウズウズしていた人もいただろう。ところがオバマは、用意した 2401 語のテキストをテキパキと 19 分間で読み上げてしまった。いつもに比べると、演説に「溜め」がなかった。おそらく、オバマが少しでも間合いをとれば、すかさず万雷の拍手によって演説は何度も中断されたはずである。8 万人の聴衆を屋外に集めた大統領候補受諾演説（08/8/28）では、オバマはそれこそロックスターのように会場を盛り上げたものなのだが。

おそらくオバマは、意図的に演説のスタイルを変えたのだろう。彼はもうアメリカの最高権力者になってしまった。今までのように、「選挙でライバルに勝つために」「目の前の有権者の 1 票を得るために」演説する必要はない。そうではなくて、目の前の有権者の負託に応えるために語らなければならない。つまり、候補者モードから大統領モードへと、演説の「文法」を変えなければならなかった。

だとしたらケネディばりの美辞麗句を並べ立てて、大向こう受けを狙うことは必ずしも得策ではない。オバマの支持率はもはや十分に高い。むしろここから先は支持率を下げないように、有権者の期待値を高め過ぎない配慮が必要になる。そういう意味では、大統領就任演説は地味目であることが望ましかった。ここで拍手喝采を浴びるよりも、「この国の前途は本当に大変だ」「そんな中で、オバマは真面目に仕事をしている」という印象を与えることが求められたのである。

それ以前に、本人が「大統領としての立場」にまだ慣れていない、という要素も無視できない。似たような現象は、前回の民主党大統領が誕生した 1993 年 1 月 20 日にも目撃した記憶がある。演説上手といわれたビル・クリントンだが、彼の大統領就任演説は妙にかしこまった、特徴のないものに終わった。その後、クリントンは分かりやすい言葉で大衆の心を掴む大統領となり、最後の頃の一般教書演説などはほとんど入神の域であったが、最初の舞台ではやはり緊張していたのである。当たり前の話であるが、選挙戦の演説がうまいからといって、大統領としての演説もうまくいくとは限らない。発想を、「戦いのため」から「統治のため」に切り替えなければならないからだ。

変な話だが、オバマ演説に以前のような「らしさ」を求めるならば、2012 年の次の選挙戦を待たなければならないだろう。もっともその時点では、彼は共和党候補の挑戦を受ける現職大統領になっていて、それなりの貫禄も出ているだろうし、4 年間の実績をバックにした横綱相撲を目指さなければならない。

オバマが徒手空拳に近い立場で、民主党内のクリントン夫妻、そして共和党の選挙マシーンという 2 つの難敵に挑んだ 2008 年選挙の感動は、もう二度と戻らないのかもしれない。それを思うと、ちょっと惜しい気がする。

「アメリカの旅」の後継者として

というわけで、今回の演説は「聴くよりも読ませるための演説」と考えた方がよさそうである。そう思って全文を通して読んでみると、これがなかなか難しい文章なのだ。

日本の新聞各紙（1月21日朝夕刊の読売、毎日、日経など）は、この演説に「新しい責任の時代」という題名を付けている。オバマは演説の後半で、“What is required of us now is a new era of responsibility”と言い、米国民一人ひとりに責任を呼びかけている。政治的メッセージとして、この言葉が見出しになるのは自然な選択であろう。ただしこのロジックがよく分からない。金融危機の問題にかこつけて考えると、「ウォール街の強欲な者たちのツケを、なぜ罪のない一般国民に負わせるのか」という批判が飛び出しそうである。

この謎を説く鍵は、全体で3回出てくる”journey”という名詞、2回出てくる”travel”という動詞ではないかと思う。オバマ就任演説は、「米国が辿ってきた旅」が全体のモチーフになっており、この「旅」に関する部分を抜き出してつなげてみると、オバマが言わんとしたことがおぼろげながら見えてくる²。

我々の旅(journey)は、近道でも安易なものでもなかった。

（無名な男女の苦労があり、戦争の犠牲もあった。そのお陰で今日がある）

これが今日、我々が続けている旅(journey)なのだ。米国は依然として地球上で最も繁栄し、力強い国だ。

（困難な旅を続けてきたお陰で、われわれは自由であり、自信に満ちている）

だから、我々が誰なのか、どれほど長い旅をしてきたのか(traveled)、その記憶とともにこの日を祝おう。

子孫に言い伝えよう。我々が試されたときもくじけず、旅(journey)を終わらせなかった、と。

要するに米国民は皆、この国が続けてきた旅の一員であり、先人たちの苦労を引き継いでいる。どんなに辛い局面でも、この旅を終わらせてはならない。（今回の金融危機も含めて）困難を挫けずに乗り越えよう。そのためには各人が責任を持たなければならない、という論理の組み立てになっているのである。

そして今日、第44代大統領に就任するのは、「60年前には、食堂で食事することを許されなかったかもしれない父親を持つ男」である。今はそれを祝うために、かくも多くの人々がワシントンに集っている。オバマがこの旅を率いる正統な指導者になったことは、なるほど快挙であるし、「これぞアメリカ」の旅といえよう。

ゆえに、この演説に表題をつけるとしたら、「アメリカの旅を続けよう」もしくは、「アメリカの旅は終わらない」といったものがふさわしい、と筆者は考えている。

² ここでの翻訳は、読売新聞社によるものを利用した。ただし（ ）内は筆者の意識である。
<http://www.yomiuri.co.jp/feature/20081107-5171446/news/20090121-OYT1T00132.htm>

「苦境を乗り越える」という物語

このように解説すると、「なぜそんな抽象的で回りくどい表現を使うのか」との印象を持たれるかもしれない。が、以前からオバマ演説には、この手の「分かる人だけが分かってくればいい」というところがあり、それがインテリ層を惹きつける隠し味になっている。つまり「みなまで言わない」人なのである。

そして演説の最後の部分、独立戦争にちなむエピソードが登場するところが、またまた難解である。不親切なことに、史実に関する固有名詞をまったく使っていないのだ³。

So let us mark this day with remembrance, of who we are and how far we have traveled. In the year of America's birth, in the coldest of months, a small band of patriots huddled by dying campfires on the shores of an icy river. The capital was abandoned. The enemy was advancing. The snow was stained with blood. At a moment when the outcome of our revolution was most in doubt, the father of our nation ordered these words be read to the people:

“Let it be told to the future world ... that in the depth of winter, when nothing but hope and virtue could survive ... that the city and the country, alarmed at one common danger, came forth to meet ... it.”

厳冬の最中、戦況は我に利あらず、首都(当時はフィラデルフィア)は英国軍に焼かれ、武器も食料も衣服も不足していた。そんなどん底状態で、ジョージ・ワシントン軍はペンシルバニア州バレーフォージで宿営する。独立軍は今にも解体寸前の心細い状況であったが、ここで兵士の士気を高め、訓練を積んだことから形勢逆転のきっかけを掴む。

つまり、「旅」がもっとも苦しかった頃を想起しつつ、今の苦難だっけと乗り越えられる、と呼びかけているわけだ。この辺はちょっと暗いトーンになっているが、この演説における「聞かせどころ」であり、同時に「聞き手の期待値を下げる」という目的も果たしている。

では、なぜここで敢えてワシントン司令官の名前を挙げないのか。おそらくそれを言ってしまうと、前後のつながりから「自分はワシントンの後継者」であることを明言することになり、オバマはそれを恥じたのではないか。なにしろこの演説の冒頭は、“I stand here today humbled by the task before us,”(今日、ここに私は職務の前に謙虚な気持ちになり)で始まっている。それでは「謙虚さ」を疑われてしまうではないか。

深読みのし過ぎかもしれないが、オバマはそういう「含羞」の感覚を有する人物ではないかと筆者は想像している。要は「まっとうなインテリ」である、ということだ。

大統領を象徴する「ひとこと」

³1月21日のBS11「INsideOUT」で小西克哉キャスターに伺ったところによれば、バレーフォージの宿営は「高校生程度の米国史の知識があれば、誰でも知っている」エピソードなのだそうだ。

歴代の大統領は、その就任演説において「歴史に残る名文句」を吐いたり、「いかにも本人の人柄を髣髴とさせる言葉」を残したりするものである。不思議なもので、再選された大統領の 2 度目の就任演説は総じて凡庸である。「作家は処女作にすべてがある」といわれるように、大統領は 1 回目の演説こそが重要である。

その中には多くの名文句がある。といっても、”The only thing we have to fear is fear itself” (FDR/1933) や、”Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.” (JFK/1961) などは、今さら「耳にタコ」であろう。そこで最近の大統領を探してみると、以下のように「らしい一言」が見つかるのである⁴。

- * 第 40 代レーガン (1981): Government is not the solution to our problem. 「政府自体が問題」という保守的な理念そのものを述べている。
- * 第 41 代ブッシュ父 (1989): It is to make kinder the face of the Nation and gentler the face of the world. いかにも共和党穏健派らしく「やさしさ」を表明した。
- * 第 42 代クリントン (1993): Communications and commerce are global; investment is mobile; technology is almost magical; and ambition for a better life is now universal. その後のグローバル化や IT 革命の 90 年代を予言しているかのようである。
- * 第 43 代ブッシュ (2001): America remains engaged in the world by history and by choice, shaping a balance of power that favors freedom. 「自由に味方する勢力均衡主義」は、のちにブッシュ・ドクトリンに発展する。

それでは今回の就任演説の中で、もっともオバマらしい言葉は何か。筆者の好みでは次の部分を挙げたい。

The question we ask today is not whether our government is too big or too small, but whether it works - whether it helps families find jobs at a decent wage, care they can afford, a retirement that is dignified.

我々が今日問うべきなのは、政府の大小ではなく、政府が機能するか否かだ。家族が人並みの給与の仕事を見つけたり、負担できる（医療）保険や、立派な退職資金を手に入れることの助けに、政府がなるかどうかだ。

本誌が何度も指摘している通り、オバマは「政策よりも政局の人」であり、政策の中身にはさほど拘泥しない。「大きな政府か、小さな政府か」といったイデオロギーには、さらに関心がない。おそらく、そういう議論は無駄だと思っているのだろう。

大事なことは「政府が機能するか否か」である。いってみれば鄧小平の「白猫黒猫論」（白い猫でも黒い猫でも、鼠を取る猫がいい猫だ）に似ている。4 年後に振り返ってみると、この部分がもっとも「オバマらしい」と感じられるのではないだろうか。

⁴ 歴代大統領の就任演説 (Inauguration) はこのサイトをご参照。 <http://www.bartleby.com/124/index.html>

リセットされたブッシュ前大統領

1月20日の就任式において、筆者がもっとも感動したのは、演説終了直後にオバマがブッシュ前大統領と抱擁したシーンである。

両者の心中がいかに分かったかは分からないが、トップの地位につくということの重圧は、なった者でなければ分からないことである。オバマとブッシュの抱擁はごく自然なものであり、きっと心の底で通じるものがあったのだと推測する。

思えばブッシュの引き際は、あっけないほどに恬淡としたものだった。投票日のうちにオバマに祝福の電話を入れ、翌日には政権移行委員会のスタッフをホワイトハウスに入れた。“Divider”（国論を二分した）と呼ばれたブッシュであるが、次期政権への引継ぎにはきわめて協力的だった。経済が危機的な状況である中であって、今回の政権移行が順調に進んだことの意義は大きい。

ところがちょうど就任式中に、筆者が家でテレビを見ながら手元のPCでホワイトハウスのHPをチェックしたところ、すべてのコンテンツが消えて、“We're Sorry --The page you requested is temporarily unavailable.”の文字が浮かんだ。ブッシュ政権の8年のデータが、すでに消え去っていたのである⁵。翌朝になって気がついたが、フロントページのアドレスを少しだけ変えると、オバマ政権の新しいページがもう立ち上がっていた。

（旧） <http://www.whitehouse.gov/index.html> ブッシュ政権：“Page not found”

（新） <http://www.whitehouse.gov/> オバマ政権：“Change has come to America”

現在では旧サイトにアクセスすると、自動的に新サイトに飛ぶようになっている。なるほど準備する時間は十分似合ったわけだし、そもそもオバマ陣営はネットに強い。「オバマ政権のホワイトハウス」は、かなり前から準備されていたのであろう。

おそらく日本で政権交代が行なわれるときは、官邸のHPで以前の政権のデータが消えたりはしないだろう。その点、米国政治は本当に前の政権をリセットしてしまう。このことが大胆な方向転換を可能にする。

1929年10月の「暗黒の木曜日」はフーバー大統領の時代であったが、ルーズベルト次期大統領が登場したのはそれから3年以上が経過した1933年であった。ところが今回の金融危機においては、あのリーマンショックからわずか5ヵ月後に政権交代が訪れた。これは実に恵まれたタイミングであったといえるのではないか。

2009年は悪い話ばかりではない、と心得ておきたいところである。

⁵ 2001年のブッシュ政権誕生の際にも、ホワイトハウスのHPからクリントン政権時代のデータがバツサリ消えた。なるべくなら、資料性の観点から前の政権のデータを残しておいてほしいものだと思うのだが。

<今週の”The Economist”誌から>

”Renewing America”

「アメリカ再生」

Cover story

January 15th 2009

* 大統領就任式を直前に控えて、”The Economist”誌が応援演説を行なっています。こういう期待感を、ほとんど全世界が共有していることでしょう。

<要約>

1月20日正午、バラク・オバマは最高の責任を担う。80年ぶりの不況、中東やアフリカの戦争、イラクやアフガンの任務、厄介なロシアと台頭する中国などだ。失業の急増や医療制度改革、赤字の増大など国内の懸念もある。一人の人間には重過ぎる負担である。

しかし200万人以上がワシントンに殺到し、何十億人もがテレビを見て、忘れていた楽観主義を取り戻すだろう。もはや9/11のショックはなく、大統領就任式は米国の自己再生能力を示す。若きカンザスとケニアの子は、深い亀裂を修復し、地球に希望をもたらそう。

米国外交はより穏健な大国として、国際法の枠内において、中東和平などに関与することとなろう。それは結構なことである。世界は問題に満ちており、指導力を求めている。米国の退場は世界のためにならない。米国抜きの中東和平はあり得ないし、イランや北朝鮮の核拡散にも対峙できない。90年代のコソボのように、国連が躊躇するところで行動する必要もある。また米国は世界同時不況に取り組み、IMFを使い、保護主義に抗し、財政刺激策を目指す。大統領は、米国がもはや超大国ではないことを理解している。より注意深く他国に耳を傾け、ともに働き、法律を尊重しつつ気候変動などの公約に臨むだろう。

憲法や法律の尊重は国内でも歓迎されよう。ブッシュは建国の父たちの法を軽視して盗聴を行い、拷問を認め、検察官を免職した。オバマはそれに倣わず、CIA長官にリベラルな部外者を、法律顧問には著名な学者を任命した。「法治より人治」の時代は終わった。

オバマの時間の大半は内政に費やされよう。米国再生には2つの相反する手法が必要だ。ひとつは金融規制の強化、景気を下支えする支出拡大、国民皆保険制の創設など、短期的には行動する政府。そして長期的には政府を縮小するプランである。社会保障支出を削減しつつ不良債権を買い取らないと、連邦政府が破産してしまう。財政再建への道筋をつけた公平な医療制度が必要だ。オバマは議会において、そのために必要な票数を有している。

ブッシュはイデオロギーや党派色で世界を見る癖があった。悪しき助言者にこだわり、世界を善悪に二分した。そして共和党の覇権を目指した。経済分野では長期を犠牲にして短期を得る癖があった。しごく重要な細部に対して、奇妙なほどに無頓着だった。

オバマは違うようだ。最重要ポストをヒラリーに提供し、ゲーツ国防長官を留任させ、近親者を近づけない決意を見せた。チームは実務能力がある中道派で固めた。失敗を認めるにやぶさかではなく、国民に対しては嫌なこともやるぞと警告を繰り返している。

次の4年もしくは8年は、失望の時代か、再生の成功か、はたまたその中間か。オバマは未熟なるも、尊敬すべき思慮深い人間である。これは良きスタートではないか。

< From the Editor > 身内による 3 冊の本

今月は関係の深い人の本が 3 冊、出版されました。いずれも大変、面白いと思いますので簡単にご紹介と宣伝まで。

「会社は毎日つぶれている」 日経プレミアシリーズ

西村 英俊著 (日本経済新聞出版社) ¥893

双日の元社長の手による「社長になった人でないと分からない、社長のための本」。刺激的なエピソードが満載で、これから各方面で物議を醸すかも。「自分は社長になるかもしれない」と少しでも思っている人は、取りあえず読んでおいて損はないですぞ。

「オバマのアメリカ・どうする日本 日本のヒューマンパワーで突破せよ！」(三和書籍)

多田 幸雄・谷口 智彦・中林 美恵子共編 ¥1,890

本誌ワシントン情報のネタ元の面々が、日米関係の前途を憂えて世に問う問題作。「政治はオバマの指示待ち、経済は米国の回復待ちでいいのか？」という指摘には、思わずうなだれるしかない。鍵を握るのは民間の力(Human Power)。小さな一歩から踏み出したい。

「世界経済 連鎖する危機」(東洋経済新報社)

中島 厚志・吉崎 達彦・塚崎 公義著 ¥1,575

正統派エコノミスト 2 氏とともに、本誌筆者が危機のさなかの世界経済を語り合っています。金融危機は、米国経済は、オバマ政権は、そして日本はこれからどうなるのか。激動の 2009 年を切り抜けるヒントが、読めばきっと見つかるはず(?)。

* 次号は 2009 年 2 月 6 日(金)を予定しています。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com